



■拘束するまで

【司祭が自宅で寝ているところに魔女が夜這い】

魔女 「美人司祭さん、こんばんはあ ♪」

司祭 「んっ……」

魔女 「あらあら、ぐつすり眠っちゃって ♪ そんなん  
じや、えっちな魔女さんに夜這いされちゃうわよお♪  
♪」

【魔女、司祭の脚や頬に触れる。】

魔女 「うふふ ♪ すべすべでキレイ ♪ 清楚な

『ヒーロー』とは思えないくらい・これはおちんぽにも期待できそうね・きっとキレイな顔に似合わない、ドスケベおちんぽなんでしょうねえ……・反応がないのはつまらないけど……もう我慢できないわ・じや、早速……』

【魔女がチンポに触ろうとしたところで、司祭が目覚め驚き、飛びのいて距離を取る】

司祭 「つっ？！ な、何ですの、あなた！ 何をしているのですっ！」

魔女 「やっと起きた・ダメよお、自分の家だからつて安心してちや……・『ヒーロー』はいつ『ヒール』に襲われるかわからないんだから・」

司祭 「襲うつて……ま、まさか夜這い……？」  
魔女 「せいかーい♪」

### 【魔女、茶化すように自己紹介】

魔女 「私はヒールのリコ。悪い魔女よ。あなたみたいにキレイな『ヒーロー』のおちんぽをどぴゅどぴゅ♪させて、ヒールにするのが趣味なの♪」

司祭 「やはり、ヒール……！ いきなり現れて夜這いなど、おふざけがすぎますわ！ わたくしはヒールになどなりません、早く出ていきなさい！」

魔女 「ふふ♪ 私の見立て通り、気丈で清楚で、正義感の高い司祭さんね♪ 埋とし甲斐があるわあ……

●「

司祭 「つ……出ていきなさいと言つていいでしょ  
う？！ それ以上近付くのではあれば、痛い目見ます  
よ？！」

魔女 「いいわよお、そうこなくちや ♡ 本気で抵抗し  
てるのを堕とすのが私の愉しみだもの ♡ さあ、せいぜ  
い抵抗しなさあい ♡」

司祭 「なんと悪趣味な……もう許せません！ では、  
この司祭・セイラがあなたを懲らしめて差し上げます  
わ！ はああっ！」

魔女 「あらあら、司祭さんらしからぬ攻撃的な魔力。  
でもお…… ♡」

【司祭セイラの魔法攻撃。しかし魔女リコが簡単に搔き  
消す】

魔女 「はーい、効かなあい ♪」

司祭 「なつ？！ わたくしの魔法を、搔き消した⋮⋮？」

魔女

「驚いた？ 私の魔力を甘く見ちやダメよお♪

それに、セイラちゃん……あなたのことばは調べてあるんだから。とつても鍛えてるんでしようけど……所詮はヒーロー。あなたの魔導力じや、私にはかなわないわ

▶

司祭 「なんですか、この魔力……？ これほどの方がいるなんて……！ ですが、ヒールに屈するわけにはまいりませんわ！」

【司祭、また魔力を溜める】

魔女 「ふふ、言われて諦めるような人じやないわよねえ。そうこなくちや」

【魔女、じわじわ近付いていく。司祭、魔力を溜めながら警告】

司祭 「……これが最後の警告です。今すぐ出ておいきなさい。さもなくば、怪我ではすみませんよ！」

魔女 「遠慮することはないわ。全力を出しなさい。その上で、屈服させてあげるから……▶」

司祭 「……そうですか。仕方ありませんね……では、わたくしの奥義を受けなさい！」

## 【司祭、巨大な魔力を生成。魔女、焦る（演技）】

魔女 「つ……何、その魔法は？！ 私も知らない切札を隠し持つてたのねえ……なかなか侮れないじやない……！ ……ねえ、今回のところは見逃してあげるわ。あなたも、たかが魔女如きに、そんな大量の魔力使いたくないでしよう？だから、ね？ お願い、待つて……！」

司祭 「警告はしました。愚かなヒールの魔女よ、裁きを受けなさい！」

魔女 「待つて、ウソでしょ？ きやああああああ……あああくくん▶ ……うつふふつ▶ なあんちやつてえ」

司祭 「そ、そんなまさかっ？ わたくしの奥義まで……」

：！」

魔女 「その程度の魔法、本気で効くと思ったの？ ほ  
らほらがんばって ♦ 抵抗しないと、悪い魔女さんに  
近寄られちやう ♦ 」

司祭 「くうつ、も、もう魔力が……！ しかしながら  
ここまで力、一体どうやつて……」

魔女 「さあ？ どうやつたか、わかるかしらあ ♦ 」

司祭 「……つ！ あなた、まさか……既に他の方を手  
にかけて……？」

### 【設定説明】

魔女 「はい、せいかーい ♦ 今まで、色んなふたなり  
おちんぽから搾り取つてきたの ♦ 何人いじめてきた  
かしら……もう覚えてないわ ♦ 」

司祭 「こ……の、外道……！」

魔女 「いいわあ、そういう褒め言葉どんどん言つて  
ちようだあい・二度とそんな口が聞けなくなるよう、  
嬌つてあげたくなつちやうから……・」

司祭 「ひつ……！」

魔女 「いいわあ、キレイな顔が絶望する瞬間……たま  
んなあい・ほら、必死に頑張つて・もつともがく  
姿を愉しませてえ・」

司祭 「こ、来ないで……！ 近寄らないでっ！」

魔女 「必死で可愛いわねえ……そんなに私が怖い？  
で、も……・」

司祭 「ああっ！」

【魔女、司祭を拘束。魔力で両手を後ろに固定される】

魔女 「……はーい、捕まえた ♪ 可愛い抵抗ありがとう ♪」

司祭 「あぐつ……腕が……つ！」

魔女 「うふつ、両手を後ろで組ませただけで、そんなに苦しんでくれるの？ ほんとに可愛いわあ♪ ♪ お礼に、たあつぱりいじめてあげるわね ♪ とりあえず、ベッドに行きましょうか ♪」

【司祭、ベッドの上で仰向けにされる】

司祭 「ああっ！ うつ……、このようなことをして！ 天罰が下りますよ！」

魔女 「いいわねえ、この状況でもまだ強気な態度がとれる精神力。でも、もう少し魔導力も鍛えた方がいいわよお？ その方が、私がいっぱい愉しめるもの ♪ そ

うだ、この際だから、その拘束魔法を自力で解けるよう  
にがんばりなさい♪……じゃ、セイラちゃんが修業  
がんばつてる間……ちよつとイタズラちやうわね……

▶

司祭 「や、やめなさい！ 早く、これを解きなさ  
いっ！  
いやっ……ああああ……つっ！」

## ■1. 媚薬マツサージ

魔女 「さあて……まずはコレを使いましょうか♪」

司祭 「な、なんですの、その液体はつ？！」

魔女 「ふふ、いい反応♪……なんだと思う？ と

うつても危ないモノよ♪」

司祭 「つ！ ま、まさか……」

魔女 「あら、セイラちゃん、清楚な顔して知つてるの  
ねえ♪ 精液から媚薬が作れる♪」

司祭 「あなたは……一体、どこまで人道に外れたこと  
を……」

魔女 「気持ち良いことのためだから別にいいじやない

● さあ、たつづぶり両手に伸ばしてえ……さあ、ど  
こから塗ろうかしら」

司祭 「もうおよしなさい、こんなことつ！ 他人に無

理矢理、こんなことをして、許されるはずが……」

魔女 「やあ～ん♪ 説教しながらも、脚ぴっちり閉じちゃって♪ 可愛いわあ♪ どこを触られるか察しちやつたのねえ♪ でも、安心して？ これ……脚に塗つても、効き目はバツグンだから♪」

司祭 「やめつ……あつ！」

魔女 「はあい、媚薬マッサージはじめます♪ まづはふくらはぎをお、もみ♪ もみ♪」

司祭 「ひつ！ いや……ああつ！」

魔女 「どう？ むるむるして、あつたかくて、気持ち良くなつてこない？」

司祭 「そんなこと、ありませんっ！ 早くそのような

汚らわしいものをしまいなさいっ！」

魔女 「いつまでその強気が保てるか、愉しみだわ♪

じや、効かないみたいだから更に増やして……♥

司祭 「ひあつ！ あ！ いやあつ！」

魔女 「ほおら、ぬる♥ぬる♥ あつたかいのが、  
じんじん♥してくるでしょお♥」

司祭 「つ……！ そんなもの……わたくしには通じま  
せんっ！」

魔女 「ふうん……強がってるだけにも見えるけど……  
まあ、流石は司祭様ってどこかしら。ふくらはぎを撫で  
るだけじや、あまり効かないわねえ……じや、更に上を  
もみもみ♥しないとね♥」

司祭 「う、上……？ いやつ、そこはつ……！」

魔女 「さあ、脚を開きなさい♥」

司祭 「いやつ！ やめてつ！ あつ……！」

魔女 「ほら、えっちな声 ♡ セイラちゃんは眞面目だから自覚はないかも知れないけど、そのドスケベな身体は、もう少しづつ興奮してきてるのよ ♡」

司祭 「そんな、こと……つ！ ああつ……力が……入らない……いやああ……つ」

魔女 「はーい、脚開いて♪ ♡ あらあら、清楚な美人司祭様のおパンツが丸見えね ♡」

司祭 「いやつ……いやあつ！ 見ないでええつ！」

魔女 「ふふ、キツキツなのはいてるわねえ……恥ずかしいくらいに おちんぽの形が浮かび上がってるわよお

▶

司祭 「い……言わないで……！ ううつ、なんでこんなことに……つ」

魔女 「でも、まだ勃起はしていないわね……もつと恥ず

かしいおちんぽになれるよう、まだまだマッサージしてあげないと●

司祭 「つっ！」

魔女 「では、膝から脚の付け根まで、失礼します●」

司祭 「あっ……んっ！ ふ、くっ……はあ……っ！」

魔女 「ふふ、可愛い声● 少しづつ効果が出てるわね……ほら、すり● すり●」

司祭 「んふう……っ！ こんなもの……効いて、ませんわ……っ！ あなたが、厭らしく触るから……き、気持ち、悪くて……っ！」

魔女

「さて、次は大事なとこを……♥」

司祭

「ひつ！」

魔女

「ふふつ ♪ セイラちゃんのおちんぽとおまんこは、触られただけで感じちゃうものね ♪ やっぱり触られるのは嫌なのねえ ♪」

司祭

「なつ……か、感じたりなどしませんわ！ いいですか、性器というものは、このように軽々しく……」

魔女 「必死ねえ♪ ま、すぐどぴゅどぴゅさせてもつまらないし、今はむちむちの太股を♪」

司祭 「ああっ！」

魔女 「ほおら、むちむちの太股も、脚の付け根も、腰だつて触り放題 ♪ いいの？ このままじや、どんどん触られちゃうわよお♪ ♪」

司祭

「つ……つ！ ん……！」

……………つ！」

魔女 「ふふ ♪ 身をよじるだけじゃ、どうしようもないわね ♪ じゃ……次はおへそ ♪」

司祭 「ふあっ？」

魔女 「どうしたの？ こんなところが責められるなんて思つてなかつた？ こんなところも媚薬を使えば敏感になつちやうのよ ♪」

司祭 「……薬や魔力で、人を思い通りにするのが、そんなに楽しいのですか……！」

魔女 「ええ、すつづく愉快いわ ♪ セイラちゃんは楽しくないのお？」

司祭 「楽しいわけがありませんっ！ こんなことをするなんて、どうかしてますわっ！」

魔女 「そお、お？ なら、ますます悦ばせたくなつちやうわ…… ♪ セイラちゃんみたいな、うぶな娘をド

スケベなヒールに堕とすのが、私の一番の愉しみだもの

」

司祭 「……わたくしは……！ あなたなどには……邪  
なものには、屈しませんわ……！」

魔女 「んふふ ♪ そのうち、あなたも愉しむようにな  
なるわ ♪

ほおら ♪ こうやって媚薬を塗つてあげながら、おへそ  
の周りや下腹部をなでなでしたら ♪

司祭 「んっ！ あんっ！」

魔女 「ひくんっ ♪ て、なつちやうのよねえ ♪」

司祭 「これは……くすぐつたいだけです！」

魔女 「そお？ その割には、声が艶っぽい気が……」

司祭 「気のせいですっ！ わたくしがそのような声な  
ど！」

魔女 「その強気を打ち崩して、今に、自分から喘ぎまくるドスケベ司祭にしてあげる▶ じやあ次はあ……おっぱい揉ませていただきまஆす▶

ふふ、なかなか立派に実ってるじやない？ 司祭さん  
らしからぬ巨乳だわ▶

司祭 「……お黙りなさい……！」

魔女 「真面目な割に、とても司祭には相応しくない、『汚らわしい』ものになつてるわよお▶」

司祭 「お、お黙りなさいと言つてはいるのですつ！」

魔女 「あら、もしかしてコンプレックスだった？ ゴ  
めんなさいね▶ でも安心して▶ 私がたあつぶり  
調教して、このえっちな身体に相応しいドスケベさん  
してあげるから▶」

司祭 「ああ……神よ……」

魔女 「祈つても無駄無駄 ♪ じゃ、おっぱいも失礼します ♪ ほおおら、粘液ぬるぬるの手で ♪ むにつ

♪ と ♪ 」

司祭 「んっは！ ああ……っ！」

魔女 「流石にここは感度良好ね ♪ ほおら、もつといくわよお……もみ、もみ ♪」

司祭 「あああっ！ く、んふうっ！ か、感度なんて……そんなもの、ありません、わ……ああっ！」

魔女 「それで隠せてるつもりなの？ 感じてるのバレバレよ ♪ こうやって指を押しつけたら……♪」

司祭 「あっ！」

魔女 「押し返してくる生意気おっぱい ♪ 感度も高くて、揉まれたたけで喘いで……これで聖職者っていうんだから、聞いて呆れちゃうわ ♪」

司祭 「ひ、人の身体を、好き勝手に言わないでくださいっ！」

魔女 「だって事実じやない？ とても司祭なんてやつてるおっぱいじやないわよコレは●」

司祭 「そんなこと……あっ！ やめっ！ あああんっ！」

魔女 「ほら、また感度が上がってる●自分で気付いてないだけで、煩惱が高まつてたのよ●」

司祭 「そんな……！ そんな、ことあるわけ……」

魔女 「そんなことあるのよ♪ 無理矢理揉まれて感じる、煩惱の塊じやない● ほら● ほおら● そろそろ乳首も責めようかしららあ●●」

司祭 「あっ！ いやあっ！ も、もういや……これ以

上はダメですっ！」

魔女 「ふふつ ♪ 嫌がつても無駄よお…… ♪ え  
いつ ♪」

司祭 「あっ！」

魔女 「んふふつ ♪ ほら、もつとがんばつて耐えて  
みなさい ♪ ほら、ほらあ ♪」

司祭 「あ！ くつ……ああつ！ あ！ あんつ！」

魔女 「ほらほら ♪ なすがままじやない ♪ 揉まれ  
るたびに感じちやつて…… ほら、乳首も責めてあげる  
つん、つんつ ♪」

司祭 「あああつ！ そこつ……やめてええつ！」

魔女 「ほおら、乳首が少しずつ勃つてきてる ♪ こ  
れを……くりくりつと ♪」

司祭 「あああつ！ そんなにつ、強くしたらつ……つ

はあっ！」

魔女 「こんなにハッキリ感じてくれちゃつて……私の  
マッサージ気に入つてくれたのね ▶ 嬉しいわあ ▶  
司祭 「はあ……つ！ は……つ！ う、嬉しく……な  
ど……つ！」

魔女 「こんな状態でも強がつてるのが、また可愛い ▶  
ま、おっぱいはこれでいいわ ▶ じゃ、次はうつぶせに  
なりなさい ▶

司祭 「ああっ！」

【司祭、うつぶせにされる。】

魔女 「背中もキレイねえ ▶ じゃ、まずは耳……  
▶ 「

司祭 「あ……」

魔女 「ここもおっぱいと変わらないくらい感じるのよ  
知つてた？ この外側を、つつつ ♪ て撫でてあげる  
とお ♪」

司祭 「ふあっ！ ああ～～～つ！」

魔女 「不思議なくらい声が出るのよねえ ♪ ほら、  
もつともつと ♪」

司祭 「あっ！ あはああっ！ ひ、人の身体でっ！  
遊んでは……はううつ！」

魔女 「ふふ ♪ だつて面白いんだもの ♪ じや、次は  
首に……つつーつ ♪ と ♪」

司祭 「あ！ あつ……あああ……つ」

魔女 「このまま背中もいくわよ ♪ 背すじを優しく、  
つつつ ♪ すりすりつ ♪」

司祭

「ふあっ！ あっ！ ……あっ！」

魔女

「ほくら ▶ なで、なで ▶ すり、すり ▶

司祭

「はあっ！ あつ……あああくし……つ」

魔女

「ふふつ ▶ もう声を抑えるのも忘れてるわね  
さて、出来上がってきたところで、そろそろ……

▶  
」

司祭

「出来上がつてなんか……いやああつ！」

魔女

「腰をベッドに押し付けて、必死に隠しちゃつて  
▶ んつふふ ▶ なんだかオナニーしてるみたい ▶  
さて、そろそろ、このまあるいお尻ね…… ▶ あらあん  
▶ 司祭様あ、なによこの衣装 ▶

司祭 「な、何がおかしいのですつ」

魔女 「髪で隠れてたけど……この服、キレイなお尻が半分くらい見えちゃってるじゃない。なあにい？見えないからって、お尻を露出させて愉しんでたのねえ

●

司祭 「違いますつ！ なんと罰当たりなことを……こ

れは、由緒正しき司祭の衣装で」

魔女 「えいっ！」

司祭 「はあんっ！」

魔女 「ほら、剥き出しだから簡単に触るのを許しちゃう。本当はみんなの前でこつそり露出して、興奮してたんでしょくく！」

司祭 「わたくしは、そんな露出狂みたいな真似しませんっ」

魔女 「ふうん……でも、お尻はえっちなことがして欲しいみたいだけど？ ほらっ ♪」

司祭 「ああっ！ さわら……ないで……っ」

魔女 「ほらほら、強がらなくていいのよ ♪ もうじっくり焦らして、昂ぶつてきてるのはわかってるんだから

●

司祭 「ああっ……そのような、こと……あるはず……

あつ ♪」

魔女 「んふふ ♪ 今、本気で感じた声が出たわね

●

司祭 「違います、今のは……あつ ♪ ああつ ♪ や

め、て…… ♪ 揉まないで、くださいいっ ♪」

魔女 「そんな甘えた声出したら、もっとやれって言つてるようなものね ♪ えっちな薬はまだまだあるわ

よお ♪ ほお～ら、すり、すりつ ♪

司祭 「いやああつ ♪ も、もうこれ以上 ♪ 変なも  
のを……ぬりたくらないでええつ ♪ あつ ♪ あ  
ひいいつ ♪

魔女 「ふふ……頃合いね ♪ ほら、また転がつて、仰  
向けになりなさい ♪」

司祭 「ああつ……！ はあ……はあ……つ」

魔女 「どんなことがあつても、そこは守るのね ♪  
でも、もう身体がふやけてきてるでしょ？ そろそろ限  
界なんじやないのお？」

司祭 「……な、何があつても ♪ 貞操だけは……守  
ります……つ ♪」

魔女

「乳首吸われても？」

司祭 「つ・な、何をされようどつ・あなたには屈しなません！」

魔女 「じやあ遠慮なく、乳首いただきまあす・んちゅつ・ちゅううつ・」

司祭 「ああつ・ああああああつ・」

魔女 「んふつ・なんだかんだいって、しつかり勃つてるじやない・服の上からでも効いてるわねえ  
● じや、もう片方も……・ああくん・」

司祭 「ひいつ・」

魔女 「じゅるつ・れろ……ちゅぱつ・じゅるる  
るつ・」

司祭 「んあつ・あつ・そんなにつ・吸つて  
はつ・はつあ・ああああつ・だ……ダメです・」

：・ 力が……抜けて……・」

魔女 「はーい隙ありー・」

司祭 「ああつ・」

魔女 「必死にアソコを守つてた両手も、もう私の片手で簡単にどかせちゃうくらい力が抜けてるのね・さて、再び司祭さんのお股を拝見つと・」

司祭 「いやつ・見ないでくださいい・」

魔女 「あら……・あらあらあ・おパンツから飛び出そなくらい、おちんぽが立派に勃起してるうつ・先っぽから、先走り汁をだらだら流しちやつて……とも貞操を守ろうなんて言えない、本気の発情勃起じやなあい・」

司祭 「いやあ……！ 違う……違うんですのお……・これは……媚薬のせいです……・」

魔女 「ふふ◆ 結局、薬には勝てなかつたことを認め  
てるじやない◆ ガツチガチに興奮してるところ、悪い  
んだけどお……当然◆ ここにも薬を塗つてあげない  
とね◆」

司祭 「いやつ◆ いやですつ◆ そこだけはあつ  
て……◆ ほおら◆ ぬるつ◆ と◆」

魔女 「根本から、カリ首の方まで丹念に……◆  
ぬりぬり◆」

司祭 「わつ◆ わたくしのつ◆ ペニスがつ◆ 媚  
薬まみれにいいつ◆」

魔女 「気持ち良いでしょお?◆ でも、おちんぽは

特別だから、更に塗りたくるわよお ♪ それ、ぬちゅ  
んつ ♪ と ♪

司祭 「あっひいつ ♪ またつ ♪ またああつ ♪ ペ  
ニスがつ ♪ 熱いひいいいいつ ♪」

魔女 「ふふつ ♪ 焦らし過ぎたかしら ♪ すつごく  
気に入ってくれたみたいねえ ♪ でも、これはまだ下準  
備に過ぎないわよ？ ここから、もつともつといじめて  
あげるんだから…… ♪」

司祭 「ひ…… ♪ ひいいい……つ ♪」

## ■2. 手コキ

魔女 「さてと……まずは、この先走り汁をいただいちやおうかしら ♪」

司祭 「ま、まさかっ！ そんなものを吸うおつもりなのですかっ？」

魔女 「自分の先走り汁なんだから、そんなものって言い方はないでしょお ♪ 少しよ、少し ♪ んちゅつ⋮⋮⋮」

⋮ ♪

司祭 「あひつ ♪ ひいいいつ ♪」

魔女 「ふふ ♪ セイラちゃんの先走り汁、おいしい♪ 流石は司祭様ね、魔力が漲つてくるわあ ♪」

司祭 「や、やはりつ ♪ このような手段で ♪ 魔力をつ⋮⋮⋮」

魔女 「そうよお？ お互い気持ちよくなれる、最高の

修業法よね ♡

司祭 「こんなこと……！ 人道に……倫理観に、反しすぎますわ……ああつ ♡」

魔女 「そういうことは、手コキを耐えてから言いなさい ♡ ほら、真ん中あたりをやさしく指で包んで、ゆくつくり、しこ ♡ しこ ♡ しこ ♡ しこつ ♡」

司祭 「あつ ♡ あ ♡ はあんつ ♡」

魔女 「どう、私の手コキ ♡ こつちも自信あるのよお ♡ 片手だけで、何人のヒーローをドビュドビュさせてきたかしら ♡」

司祭 「はうつ ♡ この ♡ 外道おつ ♡ くつ ふううつ ♡」

魔女 「あ、今は、うんと手加減してるから安心してね

すぐドピュつても困るから……って、手加減してもイ  
キそうになつてゐるけど♪」

司祭 「こ♪ これで♪ 手加減んつ♪ くほつ♪  
い♪ イキませんつ♪ こんなものおおつ♪」

魔女 「がんばつてゐわねえ……けど、こつちは正直ね  
またお汁が出たわ♪ れろつ♪ じゅるるうつ♪」

司祭

「んおおおつ♪ すつ♪ 吸わないでええつ

魔女 「かるく吸つてゐだけじやない♪ 私が本氣出  
したら、こんなもんじやないんだから♪」

司祭

「ど、どこまで♪ 見下して……んひいいつ♪

カリまでつ触れないとええつ♪」

魔女

「見下されて悔しい？ イキそう？」

ほら、セ

イラちゃん♪ がんばれ♪ がんばれ♪」

司祭

「ふつ ♪ く ♪ ふ ♪ あつ ♪」

魔女

「あ、またおちんぽがびくびくして、先走り汁が

● だらだら流れて、媚薬と混じって……ねちやね

ちやつて ● 厳らしい音が出てるわよ ♪」

司祭

「やめ……て ● 聞かせ ♪ ないで ♪」

魔女

「そうは言つても、おちんぽが悪いんだもの ♪

私じやどうしようもないわ ● ほらほら、もつと我慢しないとお ●」

司祭

「あつ ♪ く ♪ ふ——つ ♪ ふう——つ ♪」

魔女

「あはつ、ほんとに我慢しようとしてる ♪ で

も、根本から先っぽまでをなぞつてあげるとお……

●

司祭

「あつ ♪ あ ♪ ああううつ ♪」

魔女

「うふふつ ♪ はしたない声が出たわ ● ここ

なの？ セイラちゃん、裏スジが弱いのお？ ♪

司祭 「こんなつ ♪ ものつ ♪ なんともつ ♪ あひんつ ♪ そ、そんなところ ♪ 触られたくらいで ♪ わたくひはああつ ♪ 」

魔女 「我慢しなくていいのよ ♪ ほらつ ♪ おちんぽの全部を媚薬で揉みくちやにされて ♪ はしたなくイツちやいなさい ♪ セイラちゃんの煩惱、ドピュドピュしなさあいつ ♪ 」

司祭 「あああああつ ♪ いやつ ♪ いやああつ ♪ だつ ♪ ダメつ ♪ 止めつ、あつ ♪ あつ ♪ あああああああつ ♪ 」

魔女 「あはつ、出た出た ♪ えつちなおちんぽ汁、ドピュドピュ出たあつ ♪ 」

司祭 「んふああつ ♪ あ ♪ あつ…… ♪ は——つ

● はあ——つ ●

魔女 「んふふ ● 立派でドスケベな射精だつたわよ

● どう? 悪い魔女にイカされた気分は ●」

司祭 「ふつ ● う…… ● なんて ● ことを……つ

● あなたのつ……手なんかにいつ ●」

魔女 「よかつた、まだまだ元気そうね ● なら、もつ

とキツいのいくわよお…… ●」

司祭 「つつ ● わ ● わたくしは…… ● まけませ

ん……つ ●」

### ■3. 媚薬の口移し

魔女

「さ、この特製媚薬を……んつ、ん……。」

司祭

「あなた、まさか……やめ、んんんつつ。」

魔女

「んふ ♪ んつ ♪ んちゅつ ♪ れろおつ ♪」

司祭

「んつ ♪ んぐつ ♪ つく ♪ ぷはつ ♪ はつ

▶ は……つ ♪ い、いきなり ♪ 接吻などつ、何  
を考えているのですつ ♪」

魔女 「んふふ、怒らないの ♪ 当然だけど、この媚薬  
は経口摂取の方が効果が高いのよ ♪ 肌に塗ると  
違つて、すぐに効果が表れるわよお ♪」

司祭

「こ、これ以上の効果が……？ そんなこと……

ああつ  
▶

魔女

「ほら、おっぱいがまた一段と敏感になつた。」

もつともおうつと気持ち良くなるわよおう♪

司祭 「やめて ♪ やめ、なさいつ ♪ もう ♪ こ  
れ以上なんて ♪ んぶつ ♪ んつ…… ♪」

魔女 「ん ♪ ちゅるつ ♪ れろお…… ♪ んつ ♪  
ん…… ♪」

司祭 「んぶつ ♪ あ ♪ また、やめ、んむんつ ♪  
んつ ♪ んつ ♪ ふはつ ♪ あ ♪ あはあつ ♪ ぢゅ  
るつ ♪ ん…… ♪ んふう…… ♪」

魔女 「……つは ♪」

司祭 「ふはつ ♪ はつ…… ♪ はあ——つ ♪」

魔女 「ふふ…… ♪ なあにい？ 嫌がつてた割に、  
情熱的なキスをするじやない ♪」

司祭 「はつ ♪ こ、これはつ ♪ あなたがいきなり、  
舌を入れて……いや、あの…… ♪」

魔女 「かなり効いてきてるわね……頭が回らなくなつてるわよ♪ ほら、もつと素直になりなさい♪ ふうーつ♪」

司祭 「んひつ♪ やめ、やひやいつ♪ 息♪ ふきかけるのつ♪ うつひいつ♪ 耳がつ♪ 首も……熱いいいつ♪」

魔女 「息を吹いただけでビクビクしちゃつて♪ れ、おちんぽの方は……♪」

司祭 「んひやあんつ♪ いやつ♪ はおつ♪ そんなものつ♪ とらないでえつ♪」

魔女 「じゅるるるつ♪ ふふ、一発出したばかりなのに、また先走り汁が垂れてる♪ 今なら胸だけでもいけ

るかも ▶ どうなの、勃起乳首さん ▶」

司祭 「んおつ ▶ あ ▶ つはあつ ▶ ダメつ ▶ 今はダメですつ ▶ ダメですのおおつ ▶」

魔女 「ダメ? ▶ 何がダメなの? ▶ どうダメな  
のお? ▶ 言ッてくれなきやわかんなあくくい ▶」

司祭 「それはつ ▶ ちつ ▶ 乳首つ ▶ 乳首がつ  
ああああつ ▶ 熱いつ ▶ 熔けるうううつ ▶」

魔女 「もう限界みたいね ▶ イクの? ▶ 司祭様の勃  
起乳首 ▶ はしたなく両方ともイツちやうのおお? ▶」

司祭 「いやああつ ▶ イキたくないいいつ ▶ イカ  
ないつ ▶ いかないつ ▶ あつ ▶ 乳首つ ▶ 乳首

がつ ▶ あつ……つつつ ▶」

魔女 「おつと ▶ まだイカせないわよおくく ▶」

司祭 「へはつ？！ ▶ あ ▶ あ……つつ ▶ なん…  
⋮つつ」

魔女 「あら？ 今『何で』って言おうとした？ すつ  
ごくザンネン そうな顔してるし……やつぱりイキたか  
たのお？」

司祭 「そんな ▶ そんなことはありませんわつ ▶  
わ ▶ わたくしの勃起乳首はつ ▶ このような辱め  
につ ▶」

魔女 「勃起してるのは認めるのね ▶」

司祭 「つつ？！ ▶ い ▶ 今は ▶ 違つ……  
▶」

魔女 「だんだんと悦びを知ってきたわね ▶ でも、こ  
こからが本番よお…… ▶」

## ■4. パレオコキ

魔女 「またおちんぽがビクヒグして、イキたがつてる  
わねえ ♦ じゃ、これに司祭様のパレオを被せて ♦」

司祭 「あつ ♦ な、何をつ ♦ んはああつ ♦」

魔女 「ほおら、パレオで包んで、おちんぽをしこ ♦  
しこ ♦」

司祭 「あああつ ♦ なんてことをおつ ♦」

魔女 「あらあら、また先走り汁が溢れて ♦ パレオが  
濡れて、おちんぽに張り付いてる ♦」

司祭 「あああつ ♦ 神聖な衣装を ♦ 淫具にするな  
どお ♦

魔女 「その神聖な衣装で出来たオナホールで、啼くほ  
ど気持ち良くなつてるのは誰かしら？ ほら、ビクビク

してきた・また出るの・出ちやうのお？・」  
司祭 「あああつ・ダメつ・またつ・出るう：  
……ああつ？！」

魔女 「おつと・ふふ、イケると思つた？ 簡単に  
はイカせないわよ・いっぱいじめて、精液を溜め  
てから、めいっぱい惨めにドピュらせてあげる・」  
司祭 「あなたは・どこまで……あつ・ああつ  
・」

魔女 「ほら、もう一回・しこしこしましようねえ  
・」

司祭 「ああつ・こんなつ・こんなのいやあつ・  
あつ・またつ・」

魔女 「あら、また出そう？・なら今度は根元をキ  
ツうく締め付けて……・」

司祭 「ああつ ♪ で、出ないつ ♪ んひいいつ  
」

魔女 「ふふ、勃起チンポの形が歪むくらい締め付けて  
るのよ ♪ これなら精液が上がつてこないから、イキた  
くてもイケないの ♪ 」

司祭 「くふううつ ♪ ふう——つ ♪

魔女 「寸止めされてツラい？ でもまだいじめるわ  
よお ♪ ほら、カリ首にひっかけるように、しこしこ  
しこしこつ ♪ 」

司祭 「こつこの程度つ ♪ つらくなどつ ♪ んあつ  
指が ♪ カリにいい ♪

魔女 「カリ首にひっかけるようにシコられるのツラい  
でしょお？ どう？ 墮ちちやう？ 墮ちたら気持ち良

くドピュれるわよお？◆」

司祭 「堕ちませんつ◆ こんなこと◆ 気持ち良くな  
どお◆ だからつ◆ 手を◆ 早く……離しなさ  
いい◆」

魔女 「強がりながらもイキそうじやない◆ いいわ、  
出しちやいなさい◆ 神聖オナホの中でドピュっちゃ  
いなさい◆」

司祭 「ああつ◆ いやああつ◆ 止めて◆ 止めて

◆ とめつ◆ あ◆ あああああああああつ◆」

魔女 「あつはあ◆ 出たあ◆ パレオを突き破るく  
らいスゴい勢いで出てるう◆」

司祭 「ああ——つ◆ まだ出てるう◆ こんな射精

◆ いやなのにいい……◆」

魔女 「嫌なのに……気持ち良いでしょお ♡ 腰もガク  
ガク動かしちやつて ♡ 墮ちる？ ♡ 今度こそ墮ち  
ちやうう？ ♡」

司祭 「はへえ…… ♡ 墮ち……まひえん…… ♡ 腰

♦ 動いてらんか…… ♡」

魔女 「強情を張つてるけど、あと一步ね ♡ さて、そ  
ろそろトドメといくわよお…… ♡」

## ■5. パイズリフェラ

魔女 「最後は、このおっぱいで包んであげる ▶ ほ  
ら……ぎゅむうつと ▶」

司祭 「ひつ ▶ もう ▶ やめ ▶ ああああつ ▶ ペ  
ニスつ ▶ わたくしのペニスがつ ▶ お胸の中  
にいいいつ ▶」

魔女 「うふふつ ▶ 私のおっぱい、セイラちゃんの  
おっぱい食べちゃった ▶ でもスゴいわこのおちんぽ ▶  
大きすぎて、私のおっぱいからもハミ出ちゃつてる  
▶」

司祭 「あ――つ ▶ やめて ▶ 今すぐ離れてええつ  
▶」

魔女 「あら、ここからが本番なのよ ▶ まず、溢れた

先走り汁と精液を吸い取つて……んちゅうつ・ずじゅるるるつ・

司祭 「んつはあつ・ああああくくつ・」

魔女 「んふ・お掃除完了・じや、この剥き出しの  
尿道に……」

司祭 「ま、待ちなさひつ・まさか、そんなところに  
まで・媚薬を入れるおつもりではつ・」

魔女 「察しがいいわね・もしかして期待してるので  
しら・じや、フェラついでに口で直接注いであげる  
わね・んつ……」

司祭 「やめつ・もう媚薬だけはつ・ああつ

魔女 「じゅぶつ・んぢゅぶつ・ぶちゅうううつ

」

」

司祭 「はああああああつつ ♪ ペニスつ ♪ ペニスにつ流れ込んでえええつ ♪ あつ ♪ 熱つ ♪ ああああくうつ ♪ 」

魔女 「んふつ……やつぱり、媚薬はコレが一番効くわねえ ♪ さあ、更にバイフェラいくわよお ♪ おっぱいと口のダブル攻撃を味わいなさい ♪ 」

司祭 「ひいいいいいつ ♪ お胸がつ ♪ ペニスを扱いてつ ♪ はあつ ♪ 咎えないでえつ ♪ ど、同時になんてつ ♪ こんなの無理ですううつ ♪ 」

魔女 「ほらつイキなさいつ ♪ セイラちゃんの無様な墮ち顔晒しなさいつ ♪ んぢゅるるるるるつ ♪ 」

司祭 「ダメつ ♪ ダメえつ ♪ あつ はあああああああああつ ♪ 」

魔女 「んぐつ ♪ んつ……ん ♪ ふふ、セイラちや

んのおちんぽ汁、おいひいゝ

司祭 「はあ——つ ♪ あはああ——つ ♪ あ ♪

あああ…… ♪

魔女 「ど～お？ ♪ そろそろ墮ちてくれたかし  
ら？」

司祭 「うあ…… ♪ 墮ち……まひえん…… ♪ ひー  
る……らどに ♪ わたくひは ♪」

魔女 「そう ♪ なら更に媚薬追加ねつ ♪ ん  
ぢゅうううつ ♪」

司祭 「んわああつ ♪ それつ ♪ それええつ ♪ ま  
たつ ♪ ペニスがああつ ♪」

魔女 「容赦なくいくわよ ♪ おっぱいでギチギチに締  
め付けて……んぶじゅるつ ♪ ずちゅうううつ ♪」

司祭 「あ——つ ♪ ああ——つ ♪」

魔女 「んふふつ ♪ やめて欲しかつたら正直に言いなさい ♪ おちんぽ気持ち良いです、いっぱいドピュドピュしたいですうつて ♪」

司祭 「言いませんつ ♪ そんなことつ ♪ わたくしのペニスはつ ♪ ドピュドピュなんてつ ♪」

魔女 「言わないと本当に墮とすわよ ♪ んじゅうつじゅぶるるううつ ♪」

司祭 「ああくくくくくくくつ ♪ もつもうダメです ♪ 限界ですうつ ♪」

魔女 「んぶつ、なら言いなさい ♪ みつともなく恥を晒しなさあいつ ♪」

司祭 「ああつ…… ♪ わ、わたくしの、ペニス…… ♪ 気持ち良いです……」

魔女 「ペニスじやなくておちんぽつ ♪」

司祭 「んひいいつ・おちんぽ・おちん  
ぽおおおおつ・おちんぽ氣持ち良いですつ・いっぱ  
いドピュドピュしたいですううつ・お願ひですつ今  
すぐ止めてくださいつ・」

魔女 「ふふ……正直に言えたお礼に……更に媚薬を追

加ね ▶ んじゅううつ・

司祭 「そんなつ・約束がつ・ああつ・」

魔女 「そんな無様な宣言しちやう淫乱司祭様、見逃す  
わけないじやない・ほおら、狂つちやうくらいイキ  
まりなさあいつ・」

司祭 「ああああああああつ・ダメです・ダメで  
すつ・やめつ・あ・あ・いくつ・おちん  
ぽつ・おちんぽいきますつ・いっつ

魔女 司祭 「んじゅるるるるつ ♪ じゅぶるるるるつ ♪」  
「ああああつ ♪ おちんぽ吸われて ♪ またつ  
出ますつ ♪ ドピュドピュしますわつ ♪」  
あああああああああつ ♪」

魔女 「んぐつ ♪ ん ♪ ジュぶつ ♪ れろ……ふ  
はあ ♪ ……ふふ ♪ 今のでマナが尽きたわね ♪ ビ  
う？」  
ヒールになつた氣分は  
」

司祭  
「はああ……」  
最高の気分ですわ……  
んな気持ち良い世界があつたなんて……」

魔女 「ふふ、見事な堕ちつぶりね、じゃ、これからもヒール同士、仲良くしましようね。」

司祭 「はい ▶ わたくしのように、何も知らないおち

んぽ様を、たくさん導いて差し上げますわ……♥』